池　上　遺　跡

第４分冊の１

木器編

財団法人 大阪文化財センター

広鍬

鋤

例　　言

1. 本書は、大阪府和泉市池上町、泉大津市曽根町所在池上遺跡、堺市浜寺船尾町所在四ツ池遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、第２阪和国道内遺跡調査会が1969～1971年に実施し、出土遺物整理は、財団法人大阪文化財センター池上事業所遺物整理室が1973～1978年の計画で実施中である。
3. 発掘調査費・遺物整理費については、建設省近畿地方建設局が全額負担し、建設省近畿地方建設局浪速国道工事事務所が担当された。
4. これらの成果を纏めるにあたって、次の分冊形式で出版する計画を立てている。

第１分冊	池上遺跡	遺構編
第２分冊	〃	土器編
第３分冊の１	〃	石器編
〃　の２	〃	〃
第４分冊の１	〃	木器編
〃　の２	〃	〃
第５分冊	四ツ池遺跡	
第６分冊	自然遺物・総括編	
第７分冊	研究編	

本書はこれらのうち、第４分冊の１にあたるものである。

5. 本書の作成にあたっては、元第２阪和国道内遺跡調査会調査委員長代行坪井清足氏ほか調査委員の方々に全体的な指導を得た。本書に関しては、特に、金関　恕氏（天理大学文学部教授）の指導を受けた。
6. 本書は、小野久隆、奥野　都が担当した。
7. 遺物写真撮影は、写真資料室が担当し、中西和子、平井貞子、片山彰一が撮影にあたった。一部遺物については、第２阪和国道内遺跡調査会の撮影されたものを利用した。当時の撮影は、金関　恕、大塚節子の両氏が担当した。
8. 本書の作成にあっては、上記の担当者のほかに次の各氏の協力を得た。

   大槻陽子、岸本宏子、曽我哉子、田代育代、山尾真由美、井藤曉子、坂本民世、藤沢朝子、藤田一恵
9. 木質鑑定は、財団法人元興寺仏教民俗資料研究所に委託した。
10. 遺物の登録は、木器としてWの記号を与え、W01～W40の種類別番号を与えた。個々の遺物の番号は、登録順である。なお当初の分類基準を変更した部分があるので、種類別番号と分類とが一致しないものもある。
11. 一覧表の記述については、完成品、残存状況の良好なもの順におこなった。しかし、タイプ分類したものは、そのタイプ別とした。なお（　）内の数値は、復元推定値である。
12. 写真図版は、完成品、残存状況の良好なものから各タイプの代表的なものを掲載した。

13. 各種木器の点数は、1977年3月現在のものである。

14. 序分・例言については、第1分冊に一括掲載予定のため、本書の例言は折込みとする。

目　　次

はじめに……1
第1章　農　具……2
　第1節　鍬……2
　第2節　えぶり……10
　第3節　鋤……10
　第4節　槌……17
　第5節　杵……18
　第6節　臼……19

はじめに

木器篇としてここに取り扱うのは、植物性製品すなわち、木材、樹皮、などを材質とする加工品である。

植物性製品とその破片は総数 431点が採集、登録され、その他に加工の痕をとどめる植物性遺物が約 300点ある。品目別の点数はfig.1の通りである。これらのうち大多数を占めるのは木製品であり、ほかに少量、樹皮、草茎等を材質とする遺物を含む。

木製品はほとんどが弥生時代に属し、一部、古墳時代以降のものもある。弥生時代の木製品は主として、発掘地区北端付近で見出された溝（ＳＦ074～078）より弥生時代中期の土器と共伴して出土したものである。中でも溝（ＳＦ 075）一主として第Ⅱ様式一で発見されたものが最も多い。

以下の記述に当っては、まず、出土遺物を推定されるその機能によって農具、工具、漁猟具紡織具、容器、装身具、祭祀具等に分かち、この順に従ってとりあげることとする。

項目	種類	点数	小計
農具	鍬	74	149
	鋤	49	
	えぶり	2	
	槌	4	
	杵	4	
	臼	16	
工具	斧の柄	56	56
漁猟具	たも	7	21
	櫂	1	
	弓	13	
容器	鉢	41	80
	高杯	9	
	盤	4	
	杓子	13	
	匙	3	
	不明容器	10	

項目	種類	点数	小計
紡織具	織機	56	57
	紡錘車	1	
装身具	櫛	1	9
	笄	7	
	玉	1	
祭祀具	鳥	6	21
	男茎	4	
	斎串	1	
	剣	9	
	戈	1	
その他	梅子	2	8
	はしご	1	
	編物	5	
用途不明		30	30
		総数	431
		（その他の加工品 多数）	

fig.1 木器種類別点数一覧表

第1章　農　具

農具は総数 149点を数え、品目の上では鍬、鋤、えぶり等の耕作具、杵、臼など脱穀に用いたと見られるもののほか槌がある。槌は工具として用いられた可能性もあるが、従来、打杵具として農具の中に含められているので、ここでは一応この分類を踏襲することとする。

材質については鍬、鋤、杵の多くがカシ、臼がクスノキを用いている。

出土した農具における各品目の点数を比較すると、鍬類が最も多く50%を占め、次いで鋤が33%、臼が11%、槌が3%、杵3%、えぶりが1%となっている。

注目されることは鍬に未完成品が多く、鍬全体の54%を占めることである。このように未完成品の比率が高いことは他の品目には見られない特徴である。また、鍬、鋤に関しては、柾目材を用いていることは当然であるが、これに斜め方向の加工痕がしばしば観察されること、加工に用いた刃物の刃幅が2cm前後であることなどが共通の特色として上げられる。

第1節　鍬（PL.1～PL.10）

総数74点を数える。広鍬57点、狭鍬9点、又鍬3点、円鋤5点がこれに含まれる。

出土遺構は溝がほとんどである。中でも圧倒的に多いのは溝（SF 075）で40点が出土している。次いで溝（SF 074）の9点、溝（SF 079）（SF 083）の各6点の順である。時期は弥生時代前期が9点、中期が57点で後期以降はない。不明は8点。中期の内でも第Ⅱ様式が45点と最も多い。

使用痕としては、刃縁が磨耗し、丸味を帯びているものが見られる。

材質はほとんどがカシである。木取りは円鍬を除いてすべて縦木取りの柾目材を用いている。

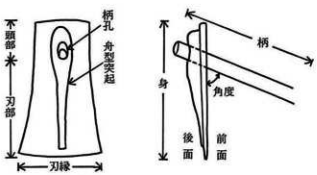


fig.2　広鍬部分名称

広　鍬

長さ約30cm、幅約20cmの比較的幅広の鍬、普通、柄孔をとりまいて舟形突起がつくり出される。これらの広鍬に、通常用いられているように、身に対して鋭角に柄を取り付けたとするならば、本遺跡出土の遺物は、柄孔の角度から、すべ

て舟形突起をつくり出さない面の方に柄が伸びることになる。そのためここでは、使用者に正対する面、すなわち舟形突起を持たない面を前面、舟形突起あるいはそれに代わる隆起を持つ面を後面と呼ぶこととする。その他の部分名称は fig.2 に示した通りである。 **前面・後面**

広鏃に特徴的なことは、未完成品の割合が非常に多く、全体の約半数を占めることである。未完成品の中には製作の過程を示すと見られる資料がある。長大な板材の縦軸に沿って中央を隆起させただけのもの、4ケ所に、はっきりと舟形突起を削り出したもの、板材に抉りを入れて個々の広鏃の輪郭を表わすが、いまだ3枚が連結した状況のもの、さらには、一枚ずつに切り離されてはいるが柄孔が穿たれていないもの、などである。しかし切り離された未完成品の形状から推察するならば、すべての広鏃が上に述べた製作過程通りに、つくられたとは断定できない。 **広鏃の未完成品**

今回、広鏃を主としてその平面形によって Ⅰ～Ⅳの4型式に分類した（fig3.）。これらの型式に分類が可能なものは57点中31点で、のこりは破片、あるいは初期の段階の未完成品のため型式は不明であった。以下それぞれの型式別に述べることとする。 **広鏃の型式分類**

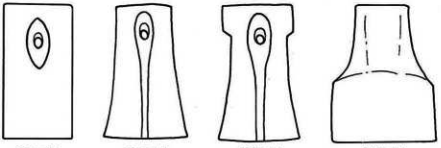


fig.3 広鏃型式分類

第Ⅰ型式　平面形が長方形を呈するもの。他の型式に比べて幅広でやや大形である。6点出土。すべて未完成品である。

いずれも舟突起をそなえるが、その形態には2通りある。一方は比較的小型の紡錘形を呈し、突起の上面が平坦につくられているものである。他方は細長い逆台形状を呈し、頭部先端から刃縁に及ぶものである。ただし、この形状のものは他の例から見て、完成に至る過程のうちで、さらに加工を加え、いくぶん改変される可能性がある。

第Ⅱ型式　刃部が裾広がりで、平面形が隠形を呈するもの。11点出土している。うち未完成品は8点。

側縁は直線状で単純に開くもの、やや内彎ぎみに開くもの、中程でわずかに屈折して外に開くものが含まれる。頭部の先端、刃縁はやや外彎するものが多い。舟型突起は細長い逆三角型あるいは逆台形状を呈し、頭部先端あるいはそのやや下からつくり出され、刃縁に及ぶ。完成品の中には突起の上端を丸く加工したものもある。また、前面の頭部先端沿いに低い段をつく

型式＼計測	全長	幅		厚	
		頭部	刃縁	頭部	刃縁
Ⅰ	35.6	21.1	20.7	6.9	3.1
Ⅱ	30.9	13.5	20.8	4.5	1.8
Ⅲ	27.8	13.3	19.6	4.0	1.3
Ⅳ	26.7	12.1	20.1	3.7	2.7

単位cm

fig.4 広鏃計測平均値一覧表

り出すものが4例ある。段の幅は5～8㎝で、頭部先端から柄孔の上端に及ぶ。

第Ⅲ型式　頭部の両側に突出部を設け、前面頭部沿いに段をつくり出すもの。8点出土、うち未完成品は3点である。

突出部以下の形状は第Ⅱ型式と同様の撥形を呈する。頭部先端、刃縁はやや外彎するものが多い。舟形突起は他の型式に比べて全体に細身である。頭部先端のやや下からつくり出され、柄孔以下急に幅が狭くなって、刃縁に及ぶものが多い。突起の上端は丸く加工され、柄孔がぎりぎりに穿たれているため、あたかも柄孔をとりまく輪郭のような形状を呈するものもある。

第Ⅳ型式　頭部の両側は大きく抉られ、はっきりとした屈折点が認められる。長さと刃部の幅はほぼ等しい。6点出土、すべて未完成品である。

舟形突起を持たない広鏃

頭部先端、刃縁は直線状を呈する。1例をのぞいては舟形突起はなく、後面頭部をわずかに隆起させるだけである。これらは舟形突起をつくり出す以前の未完成品とは考えられない。頭部は刃部に比べると肉厚ではあるが、通常の舟形突起をつくり出すには薄すぎるのである。したがってこれらは完成品の段階でも明瞭な舟形突起は持たないものと推定される。 W01—064は舟形突起を持つ唯一の例であるが、前面頭部沿いに段をつくり出すこと、刃部があまり広がらないことなど他の第Ⅳ型式のものとはやや異なった点を持つ。

狭　鏃

比較的身の幅が狭く、やや中ふくらみの長方形を呈する。かなり薄手のつくり。舟形突起は削り出さない。柄孔はやや中央寄りに穿ち、その周囲をゆるやかに隆起させている。頭部先端、刃縁はわずかに外彎するものが多い。

又　鏃

薄手のつくり。頭部は半円形を呈し、いずれも5本の歯を付けると推定される。歯は残りが悪く、長さは不明である。断面は長方形、あるいはカマボコ形を呈する。

円　鏃

ほぼ正円形を呈する。すべて未完成品で、2仁体が連結して切断されないままのもの、切り離し部を整形していないものも含まれる。切り離されていないものにあっては、頭部に台形状の輪郭を残す例がある。前面は平坦なままのものと、中央を浅く円形に削るものが見られる。後面は頭部寄りを頂点として周囲を薄く削り、全体として凸面を成すように整形している。前面に削りを持つ例とあわせて、おそらくは全体を笠状に仕上げるよう意図したものであろう。

図版番号	登録番号 出土地点 遺構番号 (遺構番号) 出土層位	法量 (cm)	全長 頭部幅 刃縁幅 頭部厚さ 刃縁厚さ	形態 分類	形態 特徴	技法	備考
PL. 1－1	W01－052 JT66 溝 (SF 081) 暗灰褐色土層	165.5 ※22.0 ※ 9.2		I	長大ややや台形を呈する厚い板材で、舟形突起4をつくり出す。後面は斜めに削ぎ、上に向って薄くする。舟形突起は紡錘形を呈し、両端に各1、中央に近接して2を配置する。	前面に木目と直行する工具痕。幅は2.7cm。	未完成品。 4遺跡。 (第Ⅰ様式)
PL. 1－2	W01－005 MD60 溝 (SF 075) 腐混黒色粘質土層	34.4 21.2 21.1 7.0 3.1		I	厚手のつくり。身の両側は厚きに差がある。舟形突起は頭部から刃部を通じてつくり出す。上半は幅広く刃部に向って狭くなり、縁を面して厚みを減ずる。突起の横断面は台形。	頭部先端は一方から雑に切断し、刃縁は両面から斜めに切る。断面は三角形。両面の刃部に幅2.8cmの工具痕。	未完成品。 (第Ⅱ様式)
PL. 1－3	W01－050 JR66 溝 (SF 081) 暗灰白色粘土層	44.0 18.0 19.0 6.5 2.6		I	厚手のつくり。後面は周辺に向って薄く削り中脚らみを呈する。舟形突起は紡錘形を呈し、やや左寄りにつくり出す。突起周辺は平坦。	身の四周は垂直に切断。両面とも木目に対して斜め方向の工具痕がわずかにのこる。	未完成品。 (第Ⅰ様式)
	W01－010 MB59 溝 (SF 075) 黒色粘質土層	32.0 25.5(26) 20.0(22) 3.4 2.0		I	頭部と刃部の一部を破損。頭部先端、刃縁とも直線状。頭部の方がやや幅広い。舟形突起は細身で薄く、頭部先端から幅、厚みを減じながら刃縁に及ぶ。	刃縁は前面から切断。両面とも工具痕を残す。幅は2cm。	未完成品。 (第Ⅱ様式)
	W01－055 JA62 溝 (SF 079) 腐混黒色粘質土層	32.0 18.5 18.0 5.0 1.7		I	頭部と舟形突起の一部を破損。刃縁は直線状。舟形突起は明瞭でないが頭部の先端からつくり出きれ、刃縁に及ぶと推定される。	刃縁は後面から切断。	未完成品。 (第Ⅲ～Ⅳ様式)
	W01－073 GS57 溝 (SF 083) 黄褐色砂層	36.5 20.5 22.0 5.8 3.3		I	刃部の一部を破損。頭部先端、刃縁とも直線状。舟形突起は頭部先端からつくり出きれ、幅、厚みを減じながら刃部中程に及ぶ。突起の横断面は台形。	頭部先端に幅約2cmの工具痕。	未完成品。
PL. 2－1	W01－016 MB59 溝 (SF 075) 腐混黒色粘質土層	33.3 11.7(13) 11.0(21) 3.4 1.7		II	側縁は直線状。後面の中央がやや厚く、周辺は薄い。前面は頭部先端沿いに段をつくり出す。舟形突起は頭部先端よりいくぶん下からつくり出きれ、幅と厚みを減じながら刃縁に及ぶ。突起の横断面は台形。	全体に丁寧な加工。	着柄角度70°～75° (第Ⅱ様式)
PL. 2－2	W01－009 ME60 溝 (SF 075) 腐混黒色粘質土層	28.0 10.9 21.9 5.6 1.5		II	頭部先端および刃縁はわずかに外弯し、側縁は一方のみを缺る。前面は頭部先端沿いに長さ7.0cm厚さ1.0cmの段を造り出す。舟形突起は頭部先端から幅、厚みを減じながら刃縁に及ぶ。突起の断面は台形。	身の四周は垂直に切断。両面とも木目に対して斜め方向の工具痕がのこる。幅は1.5cm。	未完成品。 (第Ⅱ様式)
PL. 3－1	W01－025 MG62 溝 (SF 075) 腐混黒色粘質土層	34.5 15.5 21.5 5.7 2.5		II	頭部先端は一方の肩が上がる。刃縁は直線状。舟形突起は頭部先端からつくり出きれ、幅と厚みを減じながら刃縁に及ぶ。	頭部先端は雑に切断する。側縁および刃縁は垂直で削り痕を留める。	未完成品。 (第Ⅱ様式)
PL. 3－2	W01－020 ML60 溝 (SF 074) 腐混青緑色砂層	28.2 13.0 17.0(19) 3.0 1.3		II	刃縁はわずかに外弯。前面は頭部先端沿いに段をつくり出す。舟形突起は頭部先端よりやや下からつくり出きれ、幅と厚みを減じながら刃縁に及ぶ。	前後面とも木目に対して斜め方向の工具痕。	未完成品。 (第Ⅲ～Ⅳ様式)
PL. 4－1	W01－006 MB58 溝 (SF 075) 腐混黒色粘質土層	35.2 14.8 22.5 5.9 1.7		II	頭部先端は一方の肩がやや上がる。刃縁はやや外弯。身の両側は厚きに差がある。前面頭部に段をつくり出す。段は柄孔を避けてコ字型を呈する。舟形突起は頭部先端からつくり出きれ、幅と厚みを減じながら刃部中ほどで終わる。突起の横断面は台形。	頭部先端は雑に切断する。側縁は垂直で削り痕を残す。刃縁は両面から斜めに削り落くする。	着柄角度75° (第Ⅱ様式)
PL. 4－2	W01－070 GS 60 不明 黒褐色粘質土層	27.7 12.2 24.1 5.0 2.5		II	頭部先端は外弯。刃縁は直線状。身の両側は厚きに差がある。前面は頭部先端に沿って段をつくり出す。段の直下に洗状の削り込みを有する。舟形突起は頭部先端から刃縁に及び、縁を直して幅と厚みを減ずる。	頭部先端は両面から切断。側縁および刃縁は垂直で、削り痕を留める。	未完成品。
PL. 5－1	W01－028 MG62 溝 (SF 075) 腐混黒色粘質土層	34.5 14.0 19.3 6.5 2.7		II	厚手のつくり。頭部先端は外弯、刃縁は直線状。舟形突起は頭部先端からつくり出き れ、中程から幅と厚みを減じながら刃縁へ及ぶ。突起の横断面は台形。	加工痕は不明。 頭部先端、刃縁とも両	未完成品。 (第Ⅱ様式)
	W01－068 GO61 不明	28.0 16.5(18) 19.5(20) 3.0 1.6		II	頭部先端は直線状。刃縁はやや外弯する。舟形突起は頭部先端の幅分下からつくり出きれ、幅、厚みを減じながら刃部中程に及ぶ。薄手のつくり。突出部は小さい。	前面に木目に対して斜め方向の工具痕。	未完成品。 (第Ⅱ様式)
	W01－027 MF62 溝 (SF 075) 腐混黒色粘質土層	34.0 14.5 12.3(21) 7.0 1.5		II	刃部と舟形突起の一部を欠損。頭部先端は一方の肩が上がる。刃縁は外弯する。舟形突起は頭部先端からつくり出きれ、幅、厚みを減じながら刃縁に及ぶと推定される。突起の横断面は台形。	前面に木目と同一立向の削り痕を残す。	未完成品。 (第Ⅱ様式)
	W01－071 不明	23.0 5.0(10) 11.0(22) 0.8(1) 0.4		II	身の½を欠損。薄手のつくり。頭部先端、刃縁ともやや外弯すると推定される。舟形突起は短かく、頭部先端からつくり出きれ、幅、厚みを減じながら身の中程で終わる。	加工痕不明。	着柄角度61°

(　) は復元値　※は最大幅、最大厚

広鏃

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 （遺構番号） 出土層位	法量（cm）	全長 頭部幅 刃部幅 頭部厚さ 刃端厚さ	形態 分類	形態 特徴	技法	備考
	W01－029 MG62 溝 （SF 075） 腐混黒色粘質土層	33.5(34) 8.4(13) 9.3(16) 3.8 2.0		Ⅱ	身の刃を欠損。頭部先端は不明。刃縁はやや外弯か？。舟形突起は頭部のいくぶん下からつくり出され、厚さ幅を減じながら刃縁に及ぶと推定される。	加工痕不明。	未完成品。 （第Ⅱ様式）
PL. 5－2	W01－013 MB58 溝 （SF 075） 腐混黒色粘質土層	35.0 19.1 23.5 12.2 4.6		Ⅲ	厚手のつくり。頭部先端、刃縁とも直線状。突出部は片方のみ。もう一方の側縁には浅い切り込みがある。刃縁は一上半が浅い弧状に抉られている。身の両側は厚さが異なる。舟形突起は頭部先端のやや下からつくり出され刃縁に及ぶが、輪郭ははっきりしない。	頭部先端、刃縁とも両面より切断し、断面三角形を呈する。	未完成品。 （第Ⅱ様式）
PL. 6－1	W01－037 MI63 溝 （SF 075） 腐混黒褐色砂層	26.0 10.0(11) 14.0(21) 3.2 0.5		Ⅲ	頭部先端は外弯。刃縁はほぼ直線状。突出部の張りは強い。側縁は浅い弧状で、下端は丸味をもつ。前面は頭部先端沿いに段をつくり出す。舟形突起は細身で、頭部先端から刃部中程に及ぶ。突起の横断面はほぼ長方形。	後面に木目に対して斜め方向の削り痕がわずかに残る。	着柄角度67° 刃縁の磨滅著しい。 （第Ⅱ様式）
PL. 6－2	W01－043 MC60 溝 （SF 075） 腐混黒色粘質土層	29.4 16.0 21.1 5.4 1.4		Ⅲ	頭部先端、刃縁とも直線状。側縁は上半を浅く抉る。前面は頭部先端沿いに段をつくり出す。舟形突起は頭部先端から、幅、厚みを減じながら刃縁に及ぶ。突起の横断面は台形。	頭部先端は両面から切断。工具痕の幅は約2cm。前面刃部にも削り痕。	未完成品。 （第Ⅱ様式）
PL. 6－3	W01－007 MB58 溝 （SF 075） 腐混黒色粘質土層	30.9 8.0(17) 13.5(22) 4.5 1.2		Ⅲ	頭部先端は直線状。刃縁はやや外弯する。突出部は一方が長い。側縁は単純に開く。前面は頭部先端沿いに段をつくり出す。舟形突起は頭部先端のいくぶん下から始まり、幅、厚みを減じながら刃縁に及ぶ。突起の横断面は台形。	頭部先端は両面から切断。工具痕の幅は約2cm。前面の段の表面に削り痕。	未完成品。 （第Ⅱ様式）
	W01－004 MF60 溝 （SF 075） 腐混黒色粘質土層	24.0 7.2(9.5) 2.5(17) 3.4 0.4		Ⅲ	身の刃を欠損。頭部先端は直線状。前面は頭部沿いに段をつくり出す。舟形突起は細身。頭部先端から刃縁に及ぶ。突起の横断面は平行四辺形で、後面から見て全体に左へ傾く。柄孔も同様。	加工痕不明。	着柄角度60°～65° （第Ⅱ様式）
	W01－039 MI63 溝 （SF 075） 腐混黒色粘質土層	21.7 9.5(10) 12.7(17) 1.1 0.4		Ⅲ	身の刃のみ残存。薄手のつくり。突起部は小さい。頭部先端は直線状。前面は頭部に段をつくり出し、さらに平行して一条の凸帯を削り出す。凸帯の幅は0.5cm。舟形空起は細身で、頭部先端からつくり出される。	突出部と凸帯に工具痕。	着柄角度78° （第Ⅱ様式）
	W01－058 LX56 溝 （SF 075） 腐混黒褐色上層	11.0(不明) 11.5(14) 11.5(20) 1.7 —		Ⅲ	頭部のみ残存。薄手のつくり。突出部は小さい。頭部先端はほぼ直線状。前面は頭部先端沿いに段をつくり出す。舟形突起は細身で、頭部のやや下から始まる。	全体にていねいな加工。	着柄角度58° （第Ⅱ様式）
	W01－041 MK64 溝 （SF 075） 腐混黒色粘質土層	10.3(不明) 4.3(10) 3.7(15) 0.5 0.8		Ⅲ	頭部の一部のみ残存。非常に薄いつくり。突出部はかなり小さい。前面には、頭部先端と平行に2条の凸帯を削り出す。凸帯の幅はいずれも0.7cm。	前面の凸帯の削り出しに工具痕。	（第Ⅱ様式）
PL. 7－1	W01－018 ML60 溝 （SF 074） 青緑色砂層	28.0 14.0 21.3 4.1 2.4		Ⅳ	厚手のつくり。頭部先端、刃縁とも直線状。後面は頭部の中程がゆるやかに隆起するが、舟形突起はつくり出さない。	頭部先端、刃縁とも両面から切断。断面は三角形、側縁は乗成で削り痕を残す。後面の周囲に工具痕が見られる。	未完成品。 （第Ⅲ～Ⅳ様式）
PL. 7－2	W01－064 GR58 溝 （SF 083） 黒色粘質土層	29.0 14.5 18.5 3.1 2.3		Ⅳ	頭部先端、刃縁ともやや外弯。身の両側は厚さに差がある。前面は頭部先端沿いに段をつくり出す。舟形突起は頭部先端から幅、厚みを減じながら刃縁に及ぶ。突起の横断面は台形。	頭部先端、刃縁とも両面から切断。側縁には削り痕が見られる。	未完成品。
PL. 7－3	W01－001 MK59 溝 （SF 074） 褐色砂層	74.8 11.5 21.5 4.0 1.6		Ⅳ	頭部先端、刃縁ともほぼ直線状。後面は頭の中程がわずかに隆起するが、舟形突起はつくり出さない。	表面に木目方向の削り痕が見られる。	未完成品。 3連結。 （第Ⅲ～Ⅳ様式）
	W01－063 GR60 溝 （SF 083） 黒色粘質土層	28.0 12.0 17.5 5.8 6.0		Ⅳ	頭部先端、刃縁ともほぼ直線状。身の中程がやや隆起するが、舟形突起はつくり出さない。	前面に木目に対して斜め方向の工具痕。側縁に削り痕。	未完成品。 （第Ⅰ様式）
	W01－002 MJ59 溝 （SF 074） 褐色砂層	25.5 8.5 4.9(22) 3.6 1.6		Ⅳ	刃部の一部を破損。頭部先端、刃縁ともほぼ直線状。頭部の中程がゆるやかに隆起する。	加工痕不明。	未完成品。 （第Ⅲ～Ⅳ様式）
	W01－021 MA 58 溝 （SF 075） 腐混黒色粘質土層	25.1 — 9.7(20) 1.5 2.0		Ⅳ	身の刃のみ残存。刃縁は直線状。頭部、舟形突起は不明。	刃縁に工具痕。	未完成品。 （第Ⅱ様式）
	W01－003 MA58 溝 （SF 075） 黒色粘質土層	23.4 6.0(13) 14.5 1.5 1.4		不明	頭部の一部を欠損。刃縁は薄く、やや外弯する。後面はわずかに隆起するが、舟形突起はつくり出さない。	一方の側縁に削り痕。 時間刃部に約2cmの工具痕。	未完成品。 （第Ⅱ様式）

（　）は復元値　※は最大幅、最大厚

狭鍬

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 （遺構番号） 出土層位	法量（cm） 全長 幅 厚さ	形態	技法	備考
	W01－040 MI57 溝 （SF 074） 褐色砂層	23.2(26) 14.2(14.5) 2.2	身の刃を欠損。頭部、刃部の区別はできない。一方短辺は外弯する。側縁はほぼ直線状。柄孔がほぼ身の中程に来ると推定される。	前面に木目方向の削り痕。	着柄角度85～87° （第Ⅲ～Ⅳ様式）
	W01－047 MH62 溝 （SF 077） 黒色土層	23.2(不明) 9.0 2.6	身の四辺を欠損。頭部はやや外弯するか？	加工痕は不明。	着柄角度57° （第Ⅱ～Ⅲ様式）
	W01－038 MJ64 溝 （SF 075） 腐混黒色粘質土層	14.7(不明) 5.7(不明) 1.9	又頁部の一部のみ残存。頭部はほぼ直線状か？	加工痕は不明。	着柄角度64° （第Ⅱ様式）
	W01－031 MH62 溝 （SF 075） 腐混黒色粘質土層	—— 6.5(13) 1.5	木丙孔の周囲のみ残存。頭部、刃部の区別はできない。丁則縁は直線状か？	加工痕は不明。	着柄角度65～70° （第Ⅱ様式）

又鍬

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 （遺構番号） 出土層位	法量（cm） 全長 厚さ 歯の長さ 幅	形態	技法	備考
PL.8－5	W03－004 LX56 溝 （SF 075） 黒褐色腐植土層	12.8(不明) 20.8(不明) 0.5 3.5(不明) 1.8～3.1	頭部先端と歯のほとんどを欠損。薄手のつくり。頭部は半円形を呈すると推定され、周囲を薄すする。柄孔は不明。歯は5本で、両側の2本がやや幅広と推定される。歯の間隔は2.5cm。	片面に幅1.4cmの工具痕。	（第Ⅱ様式） 着柄角度78°
PL.8－6	W03－005 IX66 溝 （SF 079） 腐混灰黒色粘土層	14.8(不明) 13.7(不明) 2.6 —— 1.3	頭部の一部と歯のほとんどを欠損。頭部は半円形で周囲を薄くする。柄孔は楕円形、歯は5本と推定される。間隔は1.5cm。	片面に幅2.0cmの工具痕。	着柄角度78° （第Ⅱ様式）
	W03－001 MI57 溝 （SF 074） 腐混黒色粘質土層	9.1(不明) 10.3(不明) 1.5 2.7(不明) 1.0	頭部の一部と歯のほとんどを欠損。頭部は半円形を呈すると推定される。周囲は薄い。柄孔は横長の楕円形。歯は5本と推定される。頭部より薄い。		着柄角度90° （第Ⅲ～Ⅳ様式）

円鍬

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 （遺構番号） 出土層位	法量（cm） 長さ 幅 厚さ	形態	技法	備考
PL.9－1	W04－001 JN55 溝 （SF 079） 灰褐色砂層	9.7 8.5 1.5	平面はほぼ円形を呈する。前面は平坦で中央から頭部寄りに径18cmの浅い凹みをつける。後面は中央から頭部寄りにゆるやかに隆起する。	後面の凹みに加工痕がのこる。前面には削り痕。	未完成品。 （第Ⅱ様式）
PL.9－2	W04－005 GS58 Pit内 黒色粘質土層	13.0 15.0 7.0	一方は完形、一方は頭部破損。平面形は頭部が台形、刃部が半円形を呈する。前面は平坦で刺り込みはない。後面は中央から頭部寄りにゆるやかに隆起する。	加工痕不明。	未完成品。 2連結。 一部に焼け焦げ。
PL.10－1	W04－004 GS59 溝 （SF 083） 黄褐色砂層	22.0(33) 33.0(35) 4.5	身の刃を欠損。前面は平坦で、径10cmの浅い凹みをつける。後面はゆるやかに隆起する。	加工痕不明。	未完成品。 （第Ⅰ様式）
	W04－003 JA62 溝 （SF 079） 腐混灰黒色粘土層	28.3(30) 36.0 6.0(不明)	平面は楕円形を呈する。前面は平坦で刺り込みはない。後面はゆるやかに隆起する。	加工痕不明。	未完成品。 （第Ⅱ様式）
	W04－002 JA62 溝 （SF 079） 灰黒色粘土層	22.0(33) 33.0 4.5	側部を欠損。前面は平坦で刺り込みはない。後面は中央から頭部寄りに隆起する。	前面に木目方向の加工痕。工具痕幅2～2.5cm。	未完成品。 （第Ⅱ様式）

（　）は復元値

第2節　えぶり（PL.10）

2点出土している。いずれも歯はない。

W 01—072は出土地不明。形態は横長の長方形を呈する。刃縁はやや外彎し、頭部先端は直線状で厚みをもつ。表面の剥離が著しいため加工によるものかどうかは断定しがたいが、頭部前面が丸味をもち、後面は舟彎状に抉られている。また、舟形突起は広瞰と異なり、縦長の長方形を呈する。突起の頭部はやや厚くつくり出されていて刃縁には至らない。なお身には柄孔と併列して側縁寄りに方孔を穿っている。おそらくは対をなし、叉木を挿入したものであろう。横木取りで柾目材を用いている。法量は、全長19.5cm、頭部幅26.5（復元値30）cm、刃縁幅21.3（復元値35）cm、頭部厚2.6cm、刃縁厚0.7cm、着柄角度70°を測る。

W 01—048は溝（SF 074）出土で、第Ⅱ～Ⅳ様式の土器と共伴した。身の¼を欠損するが、頭部がわずかにひろがる逆台形状を呈すると推定される。舟形突起はなく、柄孔の周囲をゆるやかに隆起させている。えぶりとするにはやや身の幅が狭いが、横木取りであることからここではえぶりと考えておく。法量は全長11.8（不明）cm、幅18.5cm、厚さ 2.3cm、着柄角度67°を測る。

杁　従来えぶりと呼ばれたものの中には歯を持つ例が多い。しかし『倭名類聚抄』は「杁」について郭璞の方言註をひき、「把」の類で歯のないものをこれに当て、『漢語抄』によって「江布利」の音を与えている。『倭漢三才図会』に「杁」としたものも同類である。よってここでは一応これらの資料をえぶりとして分類した。

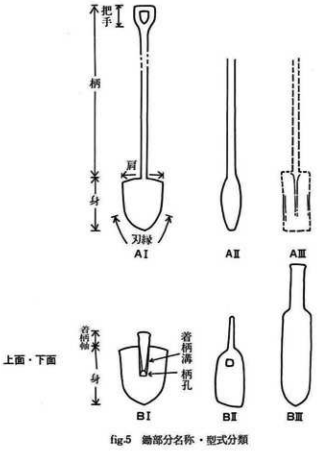


fig.5　鋤部分名称・型式分類

第3節　鋤（PL.11～PL.17）

総数47点を数える。これらの内には又鋤8点も含まれる。未完成品は3点のみである。このうち、溝（SF 075）から出土したものが16点で最も多く、次いで溝（SF 074）、溝（SF 078）の各8点である。時期はすべて弥生時代で、前期が4点、中期が35点、後期が3点、不明5点である。中期が最も多く約¾を占めるがその内分けは第Ⅱ様式17点、第Ⅲ～Ⅳ様式2点、Ⅲ～Ⅳ様式16点である。

今回、鋤の土をすくい上げる面を上面とし、反対を下面と呼ぶこととする。着柄軸は、柄孔にさし込んだ柄を固定するため、肩の中央からつくり出された突起を指す。着柄

溝は、柄孔を貫通した柄の挿入部を受けるため、身の上面に穿たれたものである（fig.5）。

使用痕としては刃部の上、下面に対応する線条痕が認められ、刃縁がかなり磨耗している例もある。材質はほとんどがカシであるが、柄にはカナメモチなどの別材を用いる例もある。木取りはすべて柾目の縦木取りである。

又鋤を除く鋤は、身と柄が一木作りかそうでないかによって、大きくA、Bの2型式に分け、さらに、それぞれを主として身の平面形によってⅠ～Ⅲの3型式づつに分類した。以下、各型式別に記述する。

AⅠ型式　身と柄が一木作りで、スコップ状を呈するもの。7点出土。うち未完成品1点。　**一木作りの鋤**

上面は平坦。下面は肩部中央に稜をつくって隆起させ、断面は三角形を呈する。柄が完存し全長を知ることができるのは1例のみである（W 02—024）。しかし、この例も柄の断面が方形で、肩が極端に厚く、刃縁に近い部分のみ削られていることなどから未完成品と見られる。また、W 02—023は柄と身の長軸が一致せず、柄が身に対して斜めにつくり出されている点で特異な例である。

AⅡ型式　身と柄は一木作り。柄の一端を序々に幅広くして小さく細長い身をつくり出す。身と柄の境界は明確でない。3点出土。うち未完成品1点。

身は上面が削られて反り上がり、下面はふくらみを持つ。この類を樋と分って、鋤の内に含めた理由は、上記の身の反り具合と、側縁に使用による磨耗痕が認められた点にある。

AⅢ型式　身と柄は一木作りと推定される。身の平面形は長方形を呈する。柄は欠損している。1点のみ出土。

上面は縦軸に沿って中央に低い凸帯を削り出す。下面は平坦。側縁はやや厚くする。本例を一木作りに含めた理由は、瓜生堂遺跡等[12]の出土品の中に類似の鋤が見られることによる。瓜生堂遺跡出土の同例と比べるならば、本例は身の上面に走る凸帯や、側縁の縁取りが明瞭でない点で、未完成品の可能性がある。

BⅠ型式　身と柄が組み合せ式で、スコップ状を呈する。身には短かい着柄軸をつくり出し、柄孔と着柄溝を設けたもの。13点出土。うち未完成品2点。　**組み合せの鋤**

身にはやや細身のもの、肩部の側縁が幅広く開くものなどの変化が見られる。肩も直線状をなすものが多いが、いくぶん下がり気味につくられたものもある。ほとんどの例は身の上面が反り上がり、下面は凸面を成している。柄孔および着柄溝は、身の中央に穿ったもの、肩近くに穿ったものがある。着柄軸は短かく、断面半円形を呈する。また、下面の先端部分には凸帯を削り出している。なお1例のみであるが、下面着柄軸の延長部に逆三角形の突起をつくり出したものがある。

BⅡ型式　身と柄は組み合せと推定される。長い着柄軸と柄孔を備え、着柄溝は設けない。1点のみ。身は縦長で反りがなく、肩は下がり円くなる。

著しく薄手のつくりであり、着柄溝がない点で、先端の曲

型式＼計測	全長	身の長さ	幅	厚
AⅠ	46.9	19.2	15.1	3.1
AⅡ	65.2	17.4	8.3	2.2
AⅢ	58.5	65.0	18.0	2.4
BⅠ	44.0	27.9	20.0	2.1
BⅡ	33.6	21.5	11.0	0.5
BⅢ	42.4	27.2	10.2	1.5

単位cm

fig6. 鋤計測平均値一覧表

った柄を挿入するか、あるいは、着柄軸との結縛のみによって着装する以外に着柄の方法は考えにくい。そのため、鋤の独立した1型式とするのに疑問はあるが仮りにBⅡ型式として分類しておく。

BⅢ型式　身と柄は組み合せ式。長い着柄軸をつくり出し、柄孔および着柄溝は設けないもの。5点出土。

身は細長く反りを持たない。肩は下がり気味にわずかに張り出す。身および着柄軸の上面は平坦。着柄軸の下面先端には凸帯をつくり出す。

fig.7　又鋤部分名称

又　鋤

総数8点を数える。完存例はないが、身の一部を残すものから推定して、いずれも二又鋤であった可能性が強い。身と柄は一木作り。肩は、やや下がり気味のもの、水平に張り出して歯へ移行する部分が円くなるものの2種ある。また歯先も、先端が円く終るもの、先端が尖るものの2種がある。身と柄の上面は平坦。柄は基部近くに段を設け、先に向って細くする。

鋤の柄

鋤の身に着装された状況のもの、柄だけが離れて出土したものを合せて6点を数える。把手の形状はT字形を呈するもの4点、V字形を呈するもの2点である。柄の断面は未完成品の1

把　手　例を除いては円形を呈する。T字形の把手は組み合せ式で、断面円形の短い別木の中央に方孔を穿ち、柄の先端を削って挿入する。方孔は貫通したものとそうでないものがある。着柄状況の明らかな2例については、柄孔への挿入部を断面長方形に削っている。V字形の把手は一木から削り出したものである。把手の断面は長方形、あるいは、外側が丸味を帯びた半円形となっている。これらV字形把手のものは、身と柄が一木作りとして分類したA型式の鋤に付くと推定されるが、身と柄の関係が明らかな資料はない。

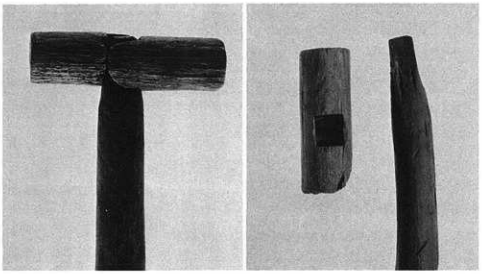


fig.8　鋤の柄の把手、着装状況

注　1）　瓜生堂遺跡調査会「瓜生堂遺跡、資料編」1972，図版25－7　45－7

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 （遺構番号） 出土層位	法量 (cm)	全長 身の長さ ＊幅 ＊厚さ	形態 分類	特徴	技法	備考
PL.11－1	W02－024 JS64 第5分井戸 （SG 108） 黒色腐植土層	89.0 24.5 15.0 4.0		A Ⅰ	身の一部を欠損。身は、両肩が下がる。刃縁は不明。身の上半はかなり厚手で、上面の刃部は薄い。柄は、身の近くが太く断面四角形で、上部はやや細平。	身の厚みが中程で極端に変化することから、上面を削っている途中の段階と推定される。柄は未調整。	未完成品。 身と柄の一部に焼痕。 （第Ⅴ様式）
PL.11－2	W02－023 NE50 溝 （SF 084） 灰褐色粘質土層	61.6(不明) 21.8(不明) 16.2 3.2		A Ⅰ	身の一部と柄の上部を欠損。肩はほぼ水平であるが左右の高さが異なる。刃縁は不明。柄は身の肩に対して斜めに付く。断面はほぼ円形。	肩に削り痕。	（第Ⅴ様式）
PL.11－3	W02－018 MM61 溝 （SF 074） 褐色砂層	58.5(不明) 19.0 15.0 2.7		A Ⅰ	柄の上部を欠損。身は両肩がわずかに下がる。刃縁は失がる。柄は、上に向ってやや細くなる。断面はほぼ円形。	肩に削り痕。	（第Ⅲ～Ⅳ様式）
PL.11－4	W02－009 MP56 溝 （SF 078） 褐色砂層	25.2(不明) 21.0(22) 9.5(15) 2.7		A Ⅰ	身の周囲と柄のほとんどを欠損。身の平面形は不明。下面は中央に稜をなして隆起する。柄の断面はほぼ円形。	加工痕は不明。	（第Ⅲ～Ⅳ様式）
PL.12－1	W02－008 MS57 溝 （SF 078） 灰緑色混砂粘質土層	33.0(不明) 33.0 14.7 2.9		A Ⅰ	柄を欠損。身は細身、肩は水平。下面は゛ゆるやかな稜をなして隆起する。刃縁は丸味をもつ。	上面に木目に対して斜めの工具痕。	刃部に細かな線条痕。使用痕か？ （第Ⅲ～Ⅳ様式）
PL.12－2	W02－010 MT58 溝 （SF 078） 灰緑色混砂粘質土層	49.3(不明) 18.8(20) 9.5(15) 3.2		A Ⅰ	身の刃と柄の上部を欠損。身は肩がやや下がる。柄は上に向ってやや細くなる。	下面に木目に対して斜め方向の工具痕。	下面の一部に焼痕。 （第Ⅲ～Ⅳ様式）
	W02－032 GN50 溝 （SF 082） 黒色細砂層	12.0(不明) 12.0(不明) 11.0(15) 2.8		A Ⅰ	身の一部のみ残存。肩はほぼ水平と推定される。側縁の上半は直線状。刃縁、柄は不明。	側縁に削り痕。	（第Ⅰ様式） 未完成品。
PL.12－3	W36－001 MN58 溝 （SF 084） 黒色粘質土層	93.1 19.0 8.0 0.9		A Ⅱ	刃部の形状はU字形。柄は、身の近くが太く断面楕円形で、上に向ってやや細くなる。柄の先端は面とりされており、把手は付かない。	両面に木目方向の削り痕。	下面の一部に焼痕。 （第Ⅴ様式）
PL.12－4	W02－034 MF54 溝 （SF 078） 腐混黒色粘質土層	78.0(不明) 19.0 7.5 2.5		A Ⅱ	柄の上部を欠損。身は側縁の一方が浅く抉られる。刃部の形状はV字形、柄は身の近くがやや太い。	加工痕は不明。	側縁の一方が浅く抉られているのは使用のためか？ （第Ⅲ～Ⅳ様式）
	W02－033 GR56 不明 黒色粘質土層	24.5(不明) 14.2 9.5 3.2		A Ⅱ	柄のほとんどを欠損。厚手。側縁は直線状。刃縁はわずかに外弩する。上面はほとんど削られていない。	刃縁に切断の際の工具痕。両面に木目に対して斜め方向の工具痕。	未完成品。
	W02－042 MN61 溝 （SF 074） 青緑色砂層	58.5(65) 58.5(不明) 12.0(18) 2.4		A Ⅲ	身の刃のみ残存。平面は長方形を呈すると推定される。上面中央に幅約3cmの低い凸帯をつくり出す。側縁は厚みをもつ。	上面に木目方向の工具痕がわずかにのこる。	（第Ⅲ～Ⅳ様式）
PL.13－1 fig.8－1	W02－020 MM60 溝 （SF 074） 腐混灰青色砂質土層	99.8(105) （着柄時） 28.4(33) 12.5(18) 2.2		B Ⅰ	柄が着装されている。身の周囲を欠損。肩はほぼ水平だが、一方がわずかに下がる。側縁、刃縁の形状は不明。着柄軸は6cmで、下面上端に突起をつくり出す。柄は断面円形。把手は T字形で、別木と組み合わせている。	柄の下端は柄孔に挿入するため扁平に削られる。把手は、別木の中央に方形の柄孔を開け、柄の上端を削って挿入する。	（第Ⅲ～Ⅳ様式）
PL.13－2	W02－031 GN52 溝 （SF 082） 黒色粘質土層	117.0 （着柄時） 20.5 15.5(18) 2.5		B Ⅰ	柄が着装されている。肩はほぼ水平。刃縁はU字形。着柄軸は6.3cmで、下面上端に低い突起をつくり出す。把手はT字形で、別木と組み合わせている。	柄の下端は柄孔に挿入するため扁平に削られる。把手は、別木の中央に方形の柄孔を開け、柄の上端を削って挿入する。	刃縁が磨滅している。使用のためか？ 着柄軸に結紐痕。 （第Ⅰ様式）
PL.14－1	W02－030 GP59 溝 （SF 083） 黒色粘質土層	27.6 24.3 17.3 2.2		B Ⅰ	肩は水平。側縁の上部は浅く抉られる。刃縁の形状はU字形。着柄軸は3.3cmで、下面上端に突起をつくり出す。	全体に丁寧なつくり。肩にかすかな工具痕。	刃縁が磨滅。 （第Ⅰ様式）
PL.14－2	W02－007 MD59 溝 （SF 075） 腐混黒色粘質土層	31.3 26.3 18.8(23) 2.5		B Ⅰ	肩はわずかに下がる。側縁の上部は浅く抉られる。刃縁の形状はU字形。上面には、肩に沿って幅約1cmの凸帯状の低い縁どりを施す。着柄溝の両側にも幅1cmの低い凸帯を削り出す。着柄軸は5cmで、下面上端に突起をつくり出す。	比較的丁寧なつくり。加工痕は不明。	着柄軸の側面に結紐痕。幅0.3cm刃縁が磨滅。 （第Ⅱ様式）
PL.15－1	W02－005 ME60 溝 （SF 075） 腐混黒色粘質土層	18.5(不明) 18.5 19.4 1.7		B Ⅰ	着柄軸を欠損。肩は下がる。側縁の上部は浅く抉られる。刃縁の形状はU字形。	上面に木目に対して斜め方向の工具痕。	刃縁が磨滅。 （第Ⅱ様式）

（　）は復元値

鋤

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 （遺構番号） 出土層位	法量（cm） 全長 身の長さ ＊幅 ＊厚さ	形態 分類	形態 特徴	技法	備考
PL.15－2	W02－025 LX56 溝 （SF 075） 腐混黒色粘土層	40.0(不明) 30.8 16.3 1.3	BⅠ	着柄軸を欠損。細身。肩はやや下がる。刃線はU字形。	両面に木目に対して斜め方向の工具痕。	刃部に細かな線条痕。使用痕か？ 着柄溝に柄の一部が残存。（第Ⅱ様式）
PL.16－1	W02－017 MH63 溝 （SF 075） 腐混黒色粘質土層	33.4 28.7 11.0(18) 2.4	BⅠ	身の片を欠損。肩はほぼ水平。刃線はU字形を呈すると推定される。下面の着柄軸の延長上に逆三角形の隆起をつくり出す。着柄軸の補強のためか？。着柄軸は4.7cmで下面上端に突起をつくり出す。	丁寧なつくり。加工痕は不明。	刃線が磨滅。（第Ⅱ様式）
PL.16－2	W02－028 LW50 溝 （SF 074） 腐混黒色粘土（含砂利）層	47.0 40.5 20.0(22) 3.5	BⅠ	側縁の一部を欠損。厚手。肩はほぼ水平。刃線は直線状。着柄溝、柄孔はつくり出されていない。着柄軸は6.5cm。	下面に、幅2.4cmの工具痕。	未完成品。（第Ⅲ～Ⅳ様式）
PL.16－3	W02－022 MK63 溝 （SF 077） 腐混黒色粘質土層	41.0 34.5 20.0 4.0	BⅠ	厚手。肩はほぼ水平。刃線は直線状。着柄溝、柄孔はつくり出されていない。着柄軸は長く、12cm。	刃線は垂直に接断。両面に、木目に対して斜め方向の工具痕。	未完成品（第Ⅱ～Ⅲ様式）
	W02－006 MC56 溝 （SF 075） 腐混黒色粘質土層	27.5 22.0 18.8(22) 2.5	BⅠ	側縁の一部を欠損、肩はやや下がる。刃線の形状は丸い。着柄軸の長さは5.5cm。軸の先端下面に突起をつくり出す。	加工痕は不明。	全体に腐蝕がひどい。（第Ⅱ様式）
	W01－034 MG63 溝 （SF 075） 黒色粘質土層	33.5(不明) 33.5(35) 25.3 0.7	BⅠ	着柄軸と着柄溝を欠損。大形で薄手。肩はほぼ水平。刃線の形状は不明。	加工痕は不明。	（第Ⅱ様式）
	W02－019 MK64 溝 （SF 075） 腐混黒色粘質土層	24.4(不明) 24.4 16.5(18) 1.5	BⅠ	着柄軸と側縁の一部を欠損。薄手のつくり。上面の反りはほとんどない。肩はやや下がる。刃線はわずかに内湾。	両面に木目に対して斜め方向の工具痕。	刃線の磨滅が甚しい。前面に焼痕。（第Ⅱ様式）
PL.16－4	W02－003 MC59 溝 （SF 075） 腐混黒色粘質土層	25.5(不明) 25.5 9.2(19) 0.8	BⅠ	身の片のみ残存。肩はやや下がる。肩の前面に、幅1cmの凸帯状の低い縁どりを削り出す。着柄溝の両側に幅0.5cmの凸帯をつくり出す。	全体に丁寧なつくり。上面に木目と斜め方向の削り痕。	（第Ⅱ様式）
	W02－013 MJ64 溝 （SF 075） 黒色粘質土層	33.6 21.5 11.0 0.5	BⅡ	非常に薄いつくり。肩は下がって丸味をもち、刃線は外湾する。着柄溝はない。着柄軸は長く、12cm。	両面に木目に対して斜め方向の工具痕。幅は1.3cm。	刃線が磨滅。（第Ⅱ様式）
PL.17－1	W02－035 LX56 溝 （SF 075） 腐混黒色粘土層	45.0 26.0 9.5 1.9	BⅢ	肩は下がる。側縁はわずかに開く。刃線の形状は丸い。着柄軸の長さは19.0cm。断面は扁平なカマボコ形。先端下面に突起をつくり出す。	着柄軸の上面に木目方向の工具痕。	（第Ⅱ様式）
PL.17－2	W02－012 MD60 溝 （SF 075） 黒色砂質土層	58.5(60) 40.6 9.5 1.8	BⅢ	着柄軸の先端を欠損。肩は下がりぎみで左右の高さが少し異なる。側縁はわずかに開く。刃線の形状は丸い。着柄軸の長さは17.9cm。扁平。	加工痕は不明。	（第Ⅱ様式）
PL.17－3	W02－011 MD60 溝 （SF 075） 腐混黒色粘質土層	26.1(不明) 11.1(不明) 7.5(9) 1.8	BⅢ	身の下半分を欠損。肩は下がる。側縁はゆるやかに外弯すると推定される。刃線の形状は不明。着柄軸の長さは15.0cm。先端下面に突起をつくり出す。	全体に丁寧なつくり。下面に木目に対して斜め方向の工具痕。	（第Ⅱ様式）
	W02－036 JA56 溝 （SF 080） 腐混灰黒色粘土層	48.3(不明) 36.5 9.0 1.0	BⅢ	着柄軸の先端を欠損。肩は下がる。側縁は直線状。刃線の形状は丸い。	加工痕は不明。	（第Ⅱ～Ⅲ様式）
	W02－021 MI63 溝 （SF 075） 黒色粘質土層	32.8(不明) 21.8(不明) 12.8(14) 0.8	BⅢ	着柄軸の先端と身の下半を欠損。肩は下がる。側縁はやや開く。刃線は不明。	加工痕は不明。	（第Ⅱ様式）
	W02－014 MU59 溝 （SF 078） 灰緑色混砂粘質土層	18.5(不明) 18.5(20) 6.7(15) 2.0	不明	刃部の一部のみ残存。ＡⅠあるいはＢⅠの破片と推定される。	上面に木目に対して斜め方向の工具痕。	（第Ⅲ～Ⅳ様式）
	W02－015 MP62 溝 （SF 074） 青灰色混砂粘質土層	16.0(不明) 16.0(不明) 5 6(12) 0.4	不明	刃部の一部のみ残存。非常に薄手。	加工痕は不明。	（第Ⅲ～Ⅳ様式）

（　）は復元値

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 （遺構番号） 出土層位	法量（cm） 全長 身の長さ ＊幅 ＊厚さ	形態 分類	形態 特徴	技法	備考
	W02－027 LX56 溝 （SF 075） 腐混黒色粘土層	17.0（不明） 17.0（不明） 8.0（16） 0.8	不明	側縁の一部のみ残存。ＢⅠの可能性がある。	上面に木目に対して斜め方向の工具痕がわずかに残る。	一部に焼痕。 （第Ⅱ様式）
	W02－029 GN54 溝 （SF 082） 黒色粘質土層	11.5（不明） 11.5（不明） 8.5 1.5	不明	刃部の一部のみ残存。ＢⅠの可能性がある。	加工痕不明。	（第Ⅰ様式）
	W02－026 LX56 溝 （SF 075） 腐混黒色粘土層	12.0（不明） 12.0（不明） 3.0（不明） 0.5	不明	刃部の一部のみ残存。ＢⅠの可能性がある。	上面に木目に対して斜め方向の工具痕。	（第Ⅱ様式）

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 （遺構番号） 出土層位	法量（cm） 全長 身の長さ ＊幅 ＊厚さ	形態	技法	備考
PL.17－4	W07－003 MH57 溝 （SF 074） 青褐色砂層	39.2（不明） 24.7 3.7（7.5） 1.6	柄の上部と身の⅓を欠損。二又鋤。歯は扁平で先端は丸い。柄は下から4cmを残して側面を削り、やや細くする。	全体に丁寧なつくり。両面に木目方向の削り痕。	（第Ⅲ～Ⅳ様式）
PL.17－5	W07－001 MR57 溝 （SF 078） 灰緑色混砂粘質土層	49.3（不明） 30.6 4.7（9.5） 1.7	柄の上部と身の⅓を欠損。二又鋤。歯の断面は半円形。先端は尖る。柄は下から12cmを残して側面および下面を削って細くする。	全体に丁寧なつくり。下面に木目方向の工具痕。	（第Ⅲ～Ⅳ様式）
	W03－002 MS59 溝 （SF 076） 灰緑色砂混粘質土層	29.5（不明） 29.5（33） 2.6（6） 1.5	身の⅓のみ現存。二又鋤。歯は扁平で先端は丸い。	下面基部に木目に対して斜め方向の工具痕。	（第Ⅱ様式）
	W07－005 不明	20.4（不明） 14.8（不明） 3.3（6） 1.3	柄の一部と身の一部のみ残存。歯の断面は扁平な長方形で先端は円い。	加工痕は不明。	
	W07－006 不明	24.5（不明） 24.5（不明） 4.0（8） 1.0	身の⅓のみ残存。歯の断面は扁平な長方形。	加工痕は不明。	
	W07－002 MU57 溝 （SF 078） 灰緑色混砂粘質土層	10.4（不明） 6.9（不明） 4.1（6） 2.2	身の一部のみ残存。歯は比較的厚みをもつ。	全体に丁寧なつくり。加工痕は不明。	（第Ⅲ～Ⅳ様式）
	W07－004 MO61 溝 （SF 074） 青灰色混砂粘質土層	27.8（不明） 27.8（不明） 3.4（不明） 1.7	歯の一部のみ残存。歯の断面は楕円形。	両面に削り痕。	（第Ⅲ～Ⅳ様式）
	W07－007 不明	4.5（不明） 4.5（不明） 5.3 1.0	歯の一部のみ残存。歯の断面は楕円形。先端は円い。	加工痕は不明。	

（　）は復元値

鋤の柄

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 （遺構番号） 出土層位	法量 (cm)	柄の長さ 。径	形態	技法	備考
PL.17－6	W05－003 MF62 溝 （SF 075） 腐混黒褐色粘質土層	35.5(不明) 3.5×2.0		把手の刃を欠損。把手はV字形を呈する。把手の長さは13cm幅は12cmを推定されろ。把手の断面は丸味を帯びた長方形。	加工痕は不明。	(第Ⅱ様式)
PL.17－7	W05－001 MO61 溝 （SF 074） 腐混青緑色砂層	30.7(不明) 2.5×2.2		把手はV字形を呈する。把手の長き6cm、幅9.2cm。把手の断面は内側が平坦な半円形を呈する。	全体に丁寧なつくり。	(第Ⅲ～Ⅳ様式)
	W05－004 不明	9.0 ——		把手の刃のみ残存。把手はV字形を呈する。把手の断面は丸味を帯びた長方形。	加工痕は不明。	
fig.8－2	W05－002 MT58 溝 （SF 078） 灰緑色混砂粘質土層	42.0(不明) 1.5		把手は組み合せでT字形を呈する。別木の中央に方形の柄孔を開け、柄の先端を削って挿入する。	柄は枝から樹皮を外したものと思われる。	(第Ⅲ～Ⅳ様式)

(　　)は復元値

第4節　槌（PL.18）

4点を数える。うち3点が溝（SF 075）から出土し、第Ⅱ様式に属する。のこりの1点は溝（SF 074）で第Ⅲ～Ⅳ様式に含まれる。

形態は、断面が円形あるいは楕円形を呈する円柱状の槌部に棒状の柄が付くものである。柄の先端をふくらませるものもある。木取りはすべて縦木取りで1例（W 06—002）を除いては心材を用いている。法量（平均値）は全長36.5cm、槌部の長さ 24.25cm、槌部の径7cmを測る。槌部の形状によって次の2型式に分類した。

第Ⅰ型式　槌部の断面が円形を呈するもの。3点。

第Ⅱ型式　槌部の断面が楕円を呈するもの。1点のみ。

使用痕を留めるものとしては、槌部の側面が浅く凹んでいるものが2点（W 16—002、006）、槌部の先端が磨滅して丸くなっているものが1点ある（W 16—001）。槌部先端の使用痕からはそれが杵と同様の用途に用いられた可能性が考えられよう。

fig.9　槌部分名称

槌

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 （遺構番号） 出土層位	法量（cm）	全長 槌部長 槌部径 柄の径	形態		技法	備考
				分類	特徴		
PL.18—1	W06—001 MD59 溝 （SF 075） 腐蝕黒色粘質土層	38.0 24.0 7.0 3.5		Ⅰ	槌部先端をわずかに欠損。槌部は断面円形を呈し、先に向ってやや太くする。先端は丸い。槌部は序々に細くなって柄に移行するが、その境界には小さな段を設けて区分している。柄は断面円形で先端はふくらむ。	槌部・柄ともに丁寧な加工。木目に対して斜め方向の工具痕。	（第Ⅱ様式）
PL.18—2	W06—006 MI57 溝 （SF 074） 褐色砂層	19.5(30) 18.5 9.0 3.5		Ⅰ	柄のほとんどを欠損。槌部の断面は円形で、先に向ってやや太くする。先端は平坦。槌部と柄は明瞭に区分される。	丁寧な加工。加工痕は槌部の先端、柄と握部の接する面に残存。工具痕の幅は1.5cm。	槌部の上半の磨滅と、中央の剥離は使用痕？ （第Ⅲ～Ⅳ様式）
PL.18—3	W06—008 MG63 溝 （SF 075） 黒色粘質土層	23.7(35) 23.0 7.5 （4）		Ⅰ	柄のほとんどを欠損。槌部は断面円形を呈す。先端は平坦。槌部と柄はゆるやかにつながる。柄の断面は円形。	加工痕は槌部と柄の接する面に残存。工具痕の幅1.5～2.0cm。	（第Ⅱ様式）
PL.18—4	W06—002 MG63 溝 （SF 075） 黒色粘質土層	43.0 31.5 5.8×3.0 2.5×1.2		Ⅱ	槌部先端の一部を欠損。槌部の断面は楕円形。先端は丸い。槌部と柄はゆるやかにつながる。柄の断面も楕円形を呈する。	槌部・柄ともに丁寧な加工。	槌部周囲の損傷が著しい。 （第Ⅱ様式）

（　）は復元値

第5節　杵（PL.18）

4点を数える。うち3点が溝（SF 075）から出土し第Ⅱ様式に属する。のこりの1例は庄内式の土器とともに井戸から出土している。

全長は、完形のもので102cmを測る。欠損しているものの1例は114cmの長さがあるので、もともと120cm内外であったことが推定されよう。

杵の形態の分類　形態は、断面が楕円形または円形の長い棒状の中央を細くつくり、撥部と握部を区分したものである。撥部と握部の形状によって次の2型式に大きく分類できる。

第Ⅰ型式　3例を数える（W 08—001，003，004）。形態の特徴は、撥部と握部の境界に段を設けて細身にし、握部に2条の突起をつくり出したものである。これらのうち1例は、握部に接する撥部の付根に幅広の低い凸帯を削り出しており、他の1例にはこの凸帯は設けられていない。また撥部のみを残す例が第Ⅰ型式に属することは断面の形状から見て確実であるが、凸帯に関しては明らかでない。

第Ⅱ型式　撥部と握部の境界を明確にせず、撥部から握部へ序々に細くなる。握部の突起もつくり出されていない。

技法に関しては、全体にていねいな加工で、木目と同一方向の加工痕を残している。

木取りは第Ⅱ型式に属するもののみが心材を用いている。

fig.10 杵部分名称　使用痕は4点とも認められる。特にW 08—004は磨滅痕がめだっている。

杵

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 （遺構番号） 出土層位	法量 （cm）	全長 握部長 撥部径 撥部径	形態 分類	形態 特徴	技法	備考
PL.18－5	W08－001 MH63 溝 （SF 075） 腐混黒色粘質土層	47.3(115) 17.0(35) 8.0×5.5 3.5×2.5		Ⅰ	1/4を欠損。撥部の断面は楕円形で、先に向って太くする。先端は丸い。撥部と握部は段をなして区分される。握部の断面は楕円形で突起をつくり出す。もともとは2つあったと推定される。突起の断面も楕円形である。	加工方向は木目と同一方向。丁寧な加工。	撥部先端は使用のため磨滅。（第Ⅱ様式）
PL.18－6	W08－004 LY58 溝 （SF 075） 黒色粘質土層	30.0(110) —— 8.0 ——		Ⅰ	撥部の一方のみ残存。断面はほぼ円形で、先に向ってややや太くする。先端は中央が円形に浅く回む（径4cm，深さ0.7cm）。	加工は丁寧な仕上げ。加工痕幅は2.4cm。	撥部先端はなめらかで、使用のため磨滅。（第Ⅱ様式）
PL.18－8	W08－002 JS60 第6号井戸 （SG 109） 不明	102.0 18.0 9.5×8.8 3.5		Ⅱ	完形。撥部、握部とも断面は円形を呈する。境界は明確にせず、なだらかにつながる。撥部の一部は丸い。他の一端は中央が回む（径5cm，深さ1.8cm）。	全体は丁寧な加工。木目と同一方向の加工。	撥部先端は使用のため磨滅。（庄内式）
PL.18－7	W08－003 LX56 溝 （SF 075） 腐混黒色粘質土層	114.5(119) 44.5 9.5×8.5 3.5×3.0		Ⅰ	撥部の一端を欠損。撥部、握部とも断面は楕円形で、先に向ってやや太くする。双方の撥部の付根に幅5cmの低い凸帯を削り出す。握部には2つの突起をつくり出す（径5～6cm）。	丁寧な加工。木目と同一方向の加工。	（第Ⅱ様式）

（　）は復元値

第6節　臼（PL.19～PL.20）

上部がややひろがる円柱状を呈し、内部が半球形に刳り込まれた形状の木製品が16点出土している。うち13点が溝（SF 075）から出土し、のこりは溝（SF 074）が2点、溝（SF 079）が1点である。時期は第Ⅱ様式が14点を占め、2点が第Ⅲ～Ⅱ様式である。

これらは以下の特徴から臼と考えられる。まず第一に、内面が非常に滑らかで、これは「搗く」あるいは「摺る」という作用によって生じた磨滅であると見られること。第二に、個体によってかなり深さが異なり、それが搗き減りの差を示すものと考えられること。底部が非常に厚いこと、などである。ただし、あまりに小型であることから、本遺跡出土の通例の杵を受けるものとして用いられたかどうかは疑問である。また、これらは1970年度の報告[2]において「摺鉢」として記述されたものであるが、摺鉢の名が示すように容器として分類するのは適当でないことから、今回その呼称を改めることとした。

搗き減り

16点中、完形品は2点、ほぼ完形であるが口縁の一部を欠くものが4点ある。

高さは最高17.3cm（W12—007）、最低7.1cm（W12—017）、平均12.0cm。口径は最大19.0cm（W12—012）、最小12.1cm（W12—017）、平均14.6cm。深さは最大12.5cm（W12—012）、最小1.1cm（W12—016）、平均6.1cmである。

形態は先に述べた通りであるが、口縁は1cm程度の厚さのものから0.1cmほどの非常に薄いものまでさまざまである。また一個体についても、厚さにかなりの差があり、高さもふぞろいである。外底面は平坦で、わずかに周囲が丸味を帯びている。内側に浅く凹むものもある。底部は厚く平均6.4cmを測る。

加工痕としては、側面に上下方向の削り、外底面に工具痕を残すものが多い。未完成品の中には内面に工具痕を留めるものもある。

木取りはすべて縦木取りで、心材を用いている。

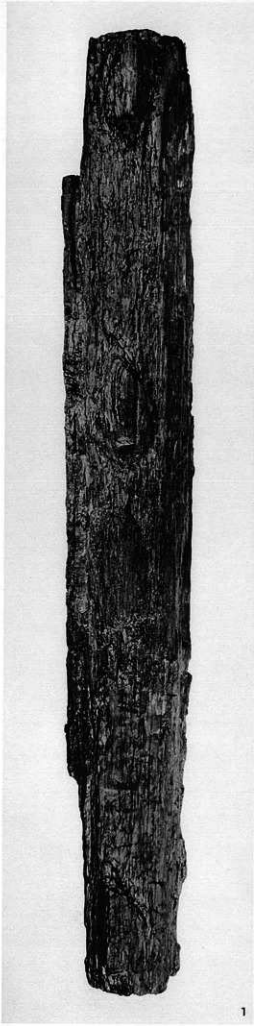
なお、1例ではあるが、口縁付近の内外面に黒漆を塗布した破片が見られる。

注　2）　第2阪和国道内遺跡調査会『池上・四ツ池』1970

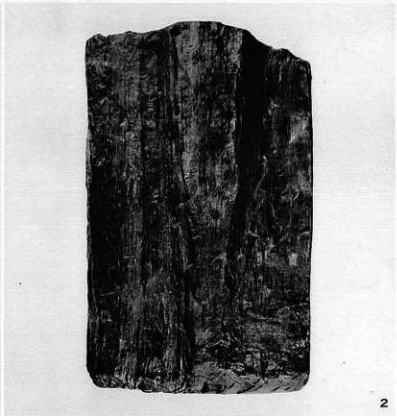
白

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 (遺構番号) 出土層位	法量 (cm)	高さ 口縁径 底部径 深さ	形態	技法	備考
PL.19－1	W12－005 MB58 溝 (SF 075) 黒色粘質土層	15.3 12.8×(11.8) 12.0×11.0 5.4		口縁と上部の一部を欠損。平面形は楕円を呈し、下半部がわずかにすぼまる。内部は浅い半球状に刳り込まれる。外底面は平坦だが、水平でないため、全体がやや傾く。	側面に上下方向の削り痕。内面に刳り込みの際の工具痕。	未完成品？ (第Ⅱ様式)
PL.19－2	W12－012 MI65 溝 (SF 075) 腐混灰褐色砂層	15.0 19.0 14.5 12.5		完形。口縁はかなり薄くラッパ状にひらく。内部は半球状にくり込まれる。外底面は平坦。	側面に上下方向の削り痕。	内面は磨滅して非常に滑らか。 (第Ⅱ様式)
PL.19－3	W12－009 MD60 溝 (SF 075) 腐混黒色砂質土層	8.3(9.0) 15.4×11.8 16.2×11.0 5.9(6.5)		底部の中央と口縁を欠損。平面形は楕円を呈する。上半部はややひろがり、口縁近くで再びすぼまる。内部はゆるやかな円錐状を呈するが、内底は丸い。外底面は平坦。	側面に上下方向の削り痕。外底面に工具痕。	内面は磨滅して非常に滑らか。 (第Ⅱ様式)
PL.19－4	W12－016 LX56 溝 (SF 075) 腐混黒色粘土層	10.7 (15.5) 11.3×9.7 1.1		口縁と上部の一部を欠損。底部の平面が楕円、口縁が円形を呈する。上半部がややひろがる。内部はごく浅く皿状に凹んでいる。外底面は平坦で、周囲は丸味をもつ。	側面に上下方向の削り痕。内面に工具痕。外底面の周囲に工具痕。	未完成品。 (第Ⅱ様式)
PL.20－1	W12－002 MD60 溝 (SF 075) 黒色粘質土層	8.8(9.5) 15.4 11.8 6.4(7.0)		口縁の一部を欠損。口縁はラッパ状にひらく。内部は半球状にくり込まれる。外底面は平坦で、周囲はわずかに丸味をもつ。	加工痕は不明。	内面は磨滅してかなり滑らか。 (第Ⅱ様式)
PL.20－2	W12－017 MF54 溝 (SF 074) 褐色砂層	7.1 12.1 (10.6) 3.0		上部の一部を欠損。全体に低く、下半部がややすぼまる。内部は皿状にくり込まれ、口縁の近くでかすかな段を持つ。口縁はかなり薄い。外底面は平坦。	加工痕は不明。	内面は磨滅して非常に滑らか。 (第Ⅲ～Ⅳ様式)
PL.20－3	W12－007 MA58 溝 (SF 075) 腐混黒色粘質土層	17.3(18.0) (17.5) 15.5 8.0(9.0)		口縁と上部の一部を欠損。やや下半部がすぼまる円柱状。内部は半球状にくり込まれる。外底面は内側にわずかに凹む。	加工痕は不明。	内面は磨滅して非常に滑らか。心材を用いるが木芯と器の中心は少しずれる。 (第Ⅱ様式)
PL.20－4	W12－013 IV68 溝 (SF 079) 腐混灰褐色砂層	13.8 13.5 12.5×11.2 0		完形。下半部がわずかにすぼまる。内部は全く刳り込まれていない。外底面は平坦で、周囲がわずかに丸味を帯びる。	側面に上下方向の削り痕。外底面の周囲に工具痕。	未完成品。 (第Ⅲ～Ⅳ様式)
	W12－008 MG62 溝 (SF 075) 黒色粘質土層	14.8(不明) 12.8(不明) 12.0 7.3(不明)		口縁のほとんどを欠損。平面は楕円を呈し、下端近くでやずかにすぼまる。内部は浅い半球状にくり込まれる。底部は厚く、小さな凹凸があり外面の周囲は丸味をもつ。	加工痕は不明。	表面は腐蝕している。 (第Ⅱ様式)
	W12－003 MC60 溝 (SF 075) 黒色粘質土層	10.0 (13.0)×(11.0) (11.0)×(9.5) 3.0		上部の一部と底部中央を欠損。平面形は楕円で内部は較的浅い半球状に刳り込まれると推定される。。外底面は内側に浅く凹む。口縁は厚めである。	加工痕は不明。	(第Ⅱ様式)
	W12－004 MD60 溝 (SF 075) 黒色粘質土層	13.0 (17.8) 10.0 6.1		全体の⅓を欠損。円柱状で、体部の中ほどからラッパ状にひらき、口縁近くで再びすぼまる。内部は半球状にくり込まれ、口縁の下に段がつく。口縁はかなり薄い外底面は内側に浅くくぼみ、周囲は丸味を帯びる。	加工痕は不明。	(第Ⅱ様式)
	W12－006 MD60 溝 (SF 075) 腐混黒色粘質土層	12.7(不明) (16.4) (14.0) 5.5		全体の⅓のみ残存。下半部はややすぼまる。内部は半球状にくり込まれる。外底面は平坦で、周囲は丸味をもつ。	下半部に上下方向の削り痕が見られる。	内面は磨滅して比較的滑らか。 (第Ⅱ様式)
	W12－015 LX54 溝 (SF 075) 腐混黒色粘土層	8.3 (14.5)×(10.5) (13.5)×(11.5) 5.8		全体の⅓のみ残存。下半部はややすぼまる。内部は比較的浅い半球状にくり込まれる。口縁はかなり薄い。外底面は内側に浅くくぼむ。	加工痕は不明。	全体に腐蝕がひどい。 (第Ⅱ様式)
	W12－011 MG62 溝 (SF 075) 黒色粘質土層	13.7 (13.5) (10.0) 8.7		全体の⅓のみ残存。口縁はやや厚めで、ラッパ状にひらく。内部は深めの半球状にくり込まれる。外底面は平坦。	側面に斜めの線条痕。	(第Ⅱ様式)
	W12－001 MK58 溝 (SF 074) 不明	10.5(不明) 15.4 —— ——		破片。内部は比較的浅く刳り込まれたと推定される。	側面に斜めの線条痕。加工痕か？	(第Ⅲ～Ⅳ様式)
	W12－018 MH64 溝 (SF 075) 腐混黒色粘質土層	—— —— —— ——		口縁の破片。内部は深めの半球状にくり込まれたと推定される。口縁は厚めである。		内面は非常に滑らか。表面に黒鉛を塗布。 (第Ⅱ様式)

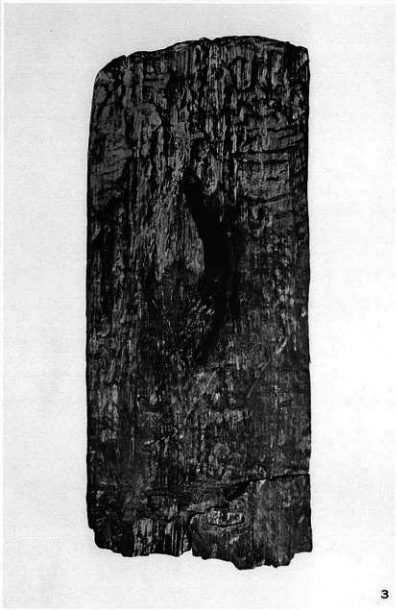
図　　版



1

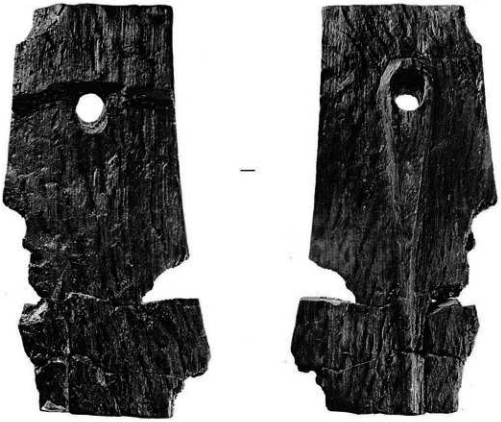


2



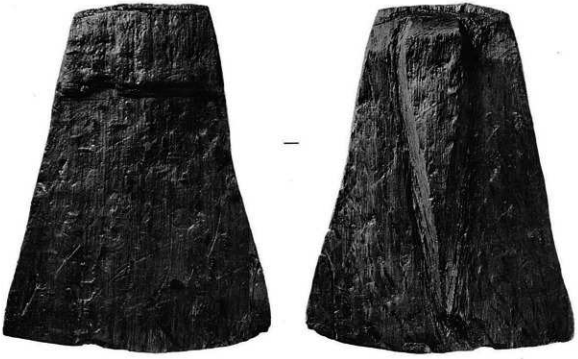
3

1. 広鍬 I（未完成品） 約1:6　　2, 3. 広鍬 I（未完成品） 1:3



1

1.　広鏃　Ⅱ　　1:3

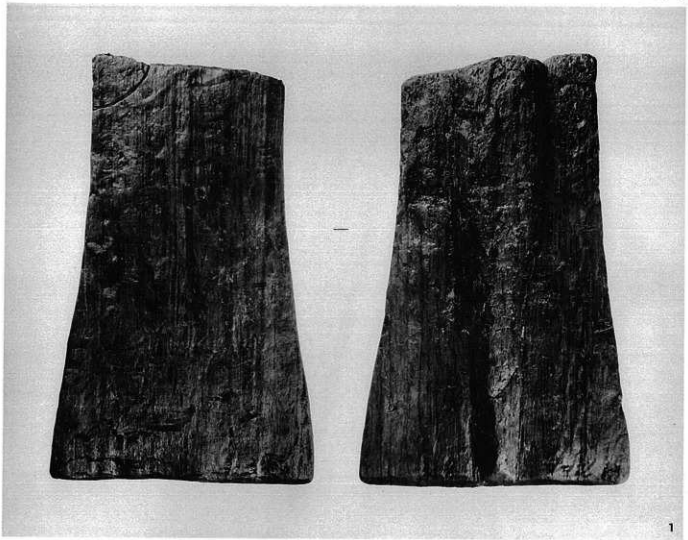


2

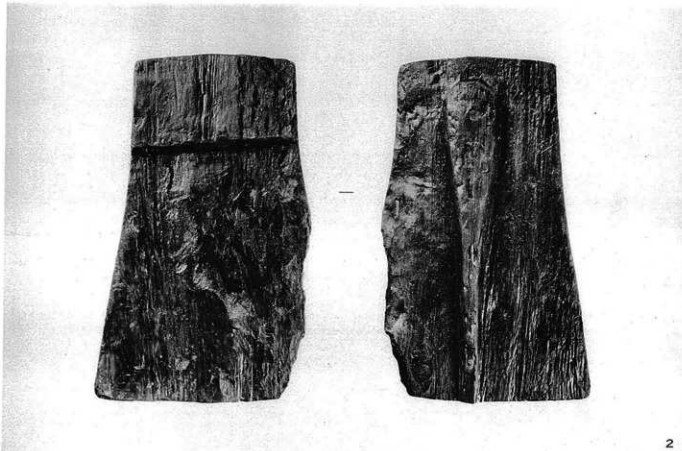
2.　広鏃　Ⅱ（未完成品）　　1:3

1. 広鍬 Ⅱ 1:3

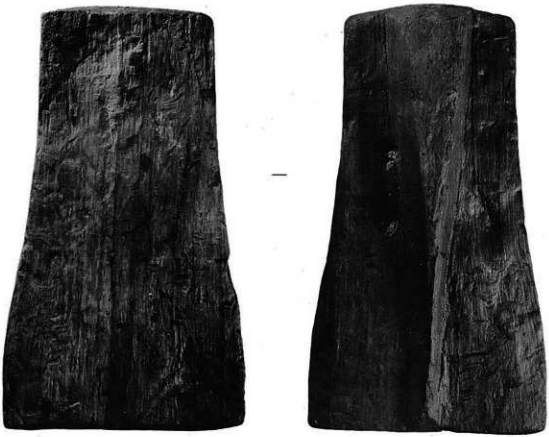
2. 広鍬 Ⅱ（未完成品） 1:3



1. 広鍬 Ⅱ（未完成品） 1:3

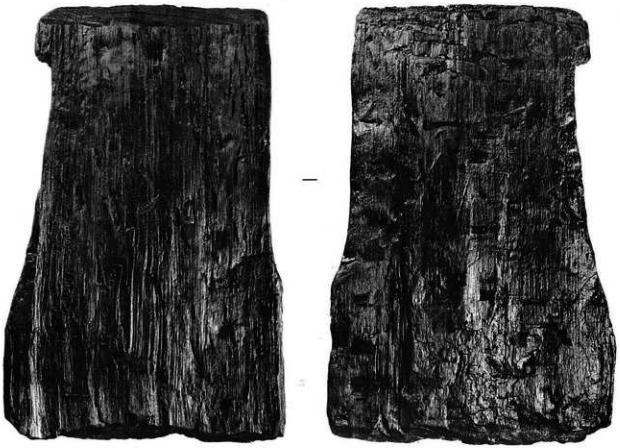


2. 広鍬 Ⅱ（未完成品） 1:3



1

1. 広鍬 Ⅱ（未完成品） 1:3



2

2. 広鍬 Ⅲ（未完成品） 1:3

1

1. 広鏃 Ⅲ 1:3

2

2. 広鏃 Ⅲ 1:3

3

3. 広鏃 Ⅲ 1:3

1

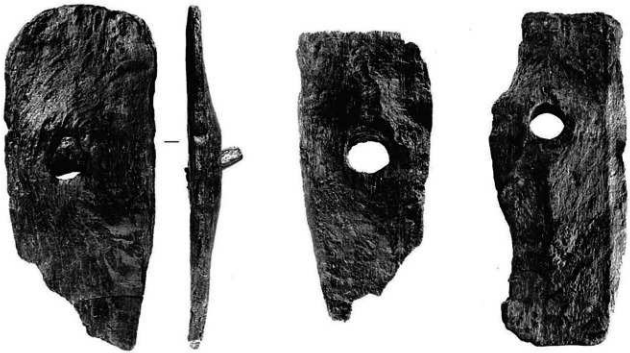
1. 広鍬 Ⅳ（未完成品） 1：3

2

2. 広鍬 Ⅳ（未完成品） 1：3

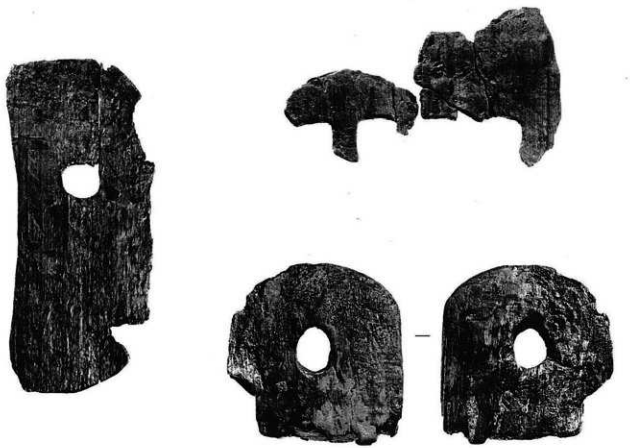
3

3. 広鍬 Ⅳ（未完成品） 1：3



1　2　3

1, 2, 3, 狭鍬　1:3

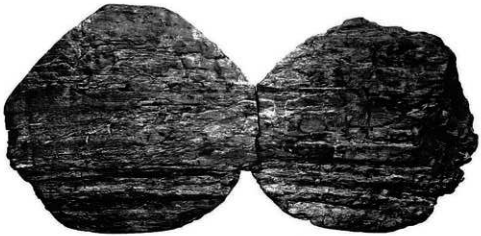


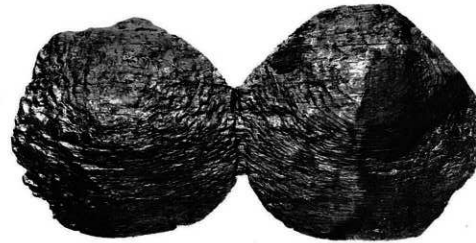
5

4　6

4, 狭鍬　5, 6, 又鍬　1:3

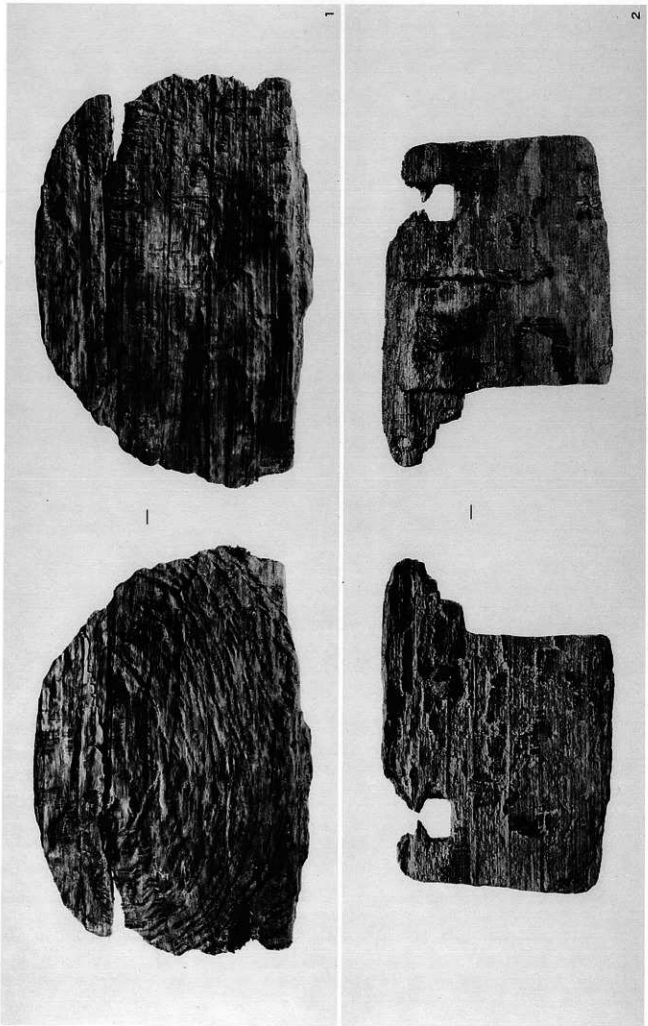
1





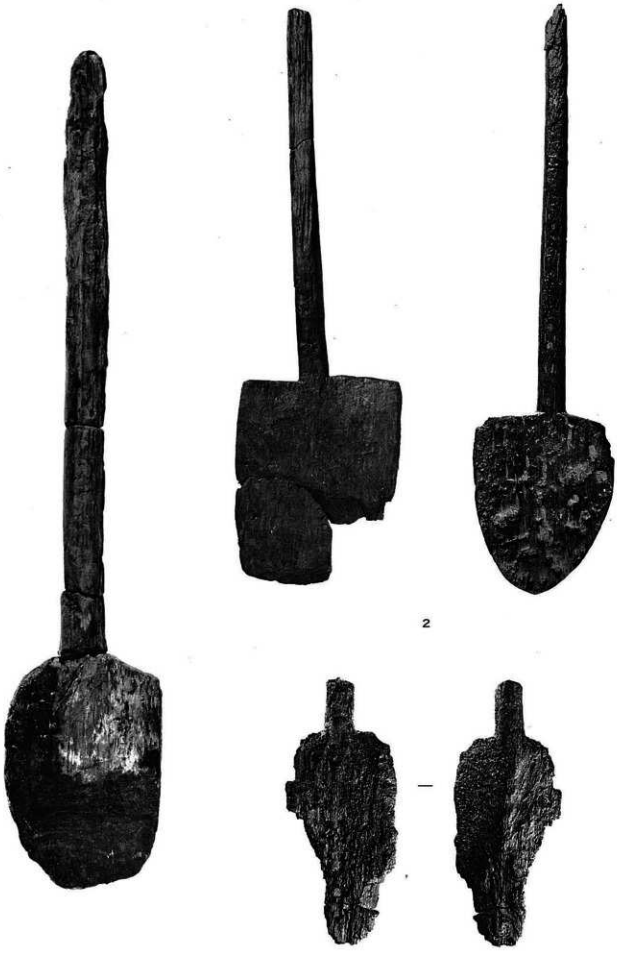
2

1，2， 円 鍬（未完成品） 1:5



1：3

1，円鍬（未完成品）　2，えぶり

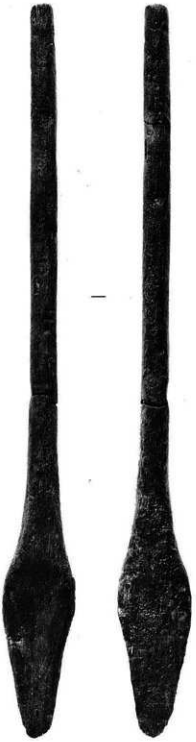


1. 鋤 AI（未完成品）　2, 3, 4. 鋤 AI　1:3

1

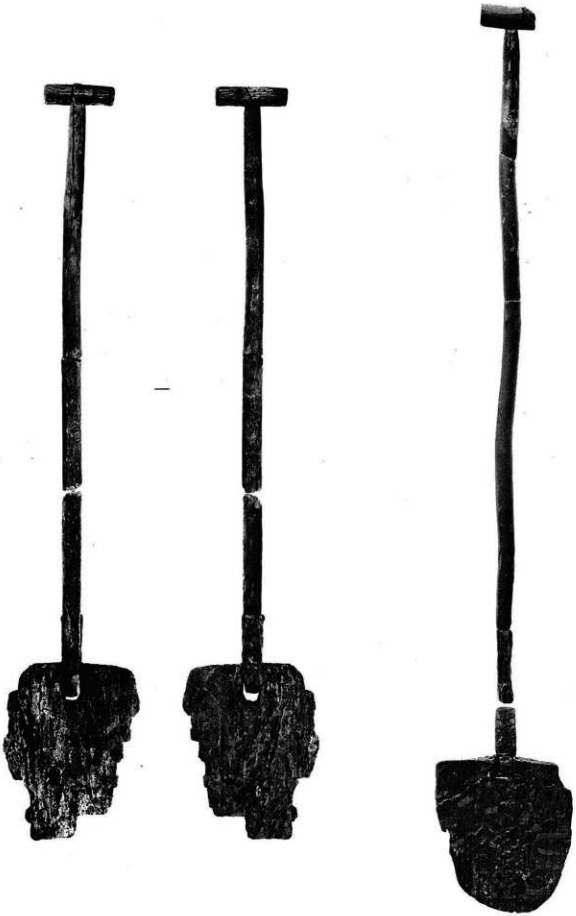
2

3



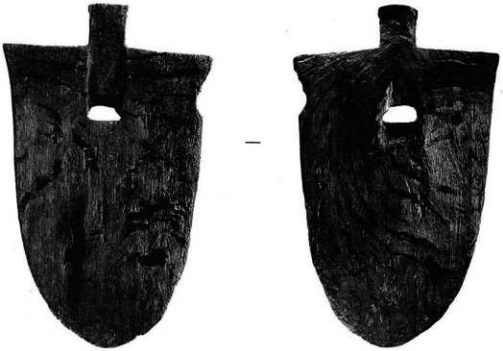
4

1. 2. 鋤 A I　　3. 4. 鋤 A II　　1:4



1　　2

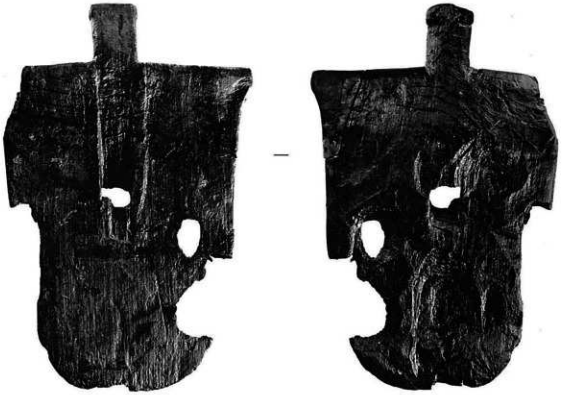
1, 2, 鋤 BI　　1:5



1

1. 鋤 BI

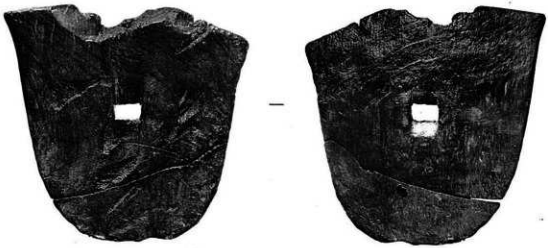
1:3



2

2. 鋤 BI

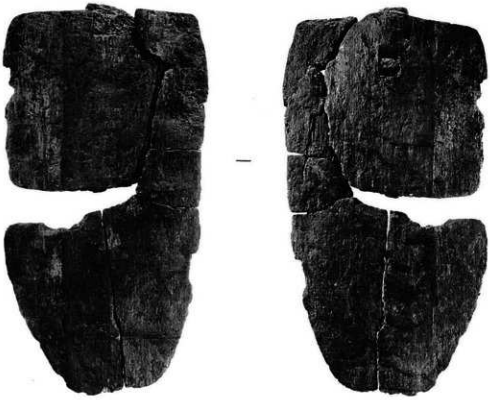
1:3



1

1. 鋤 BI

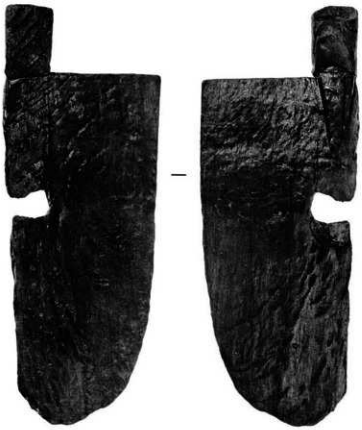
1:3



2

2. 鋤 BI

1:3



1

1. 鋤 BⅠ 1:3

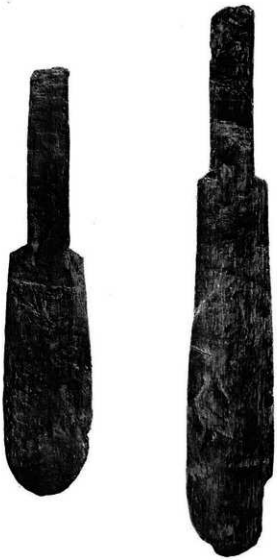
4

4. 鋤 BⅡ 1:3

2

3

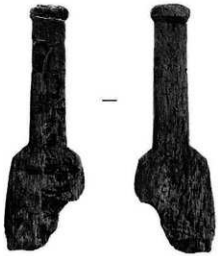
2, 3. 鋤 BⅠ（未完成品） 1:4



1 2

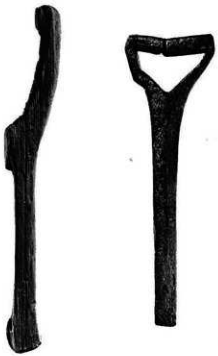
4 5

4, 5, 又 鋤 1:4



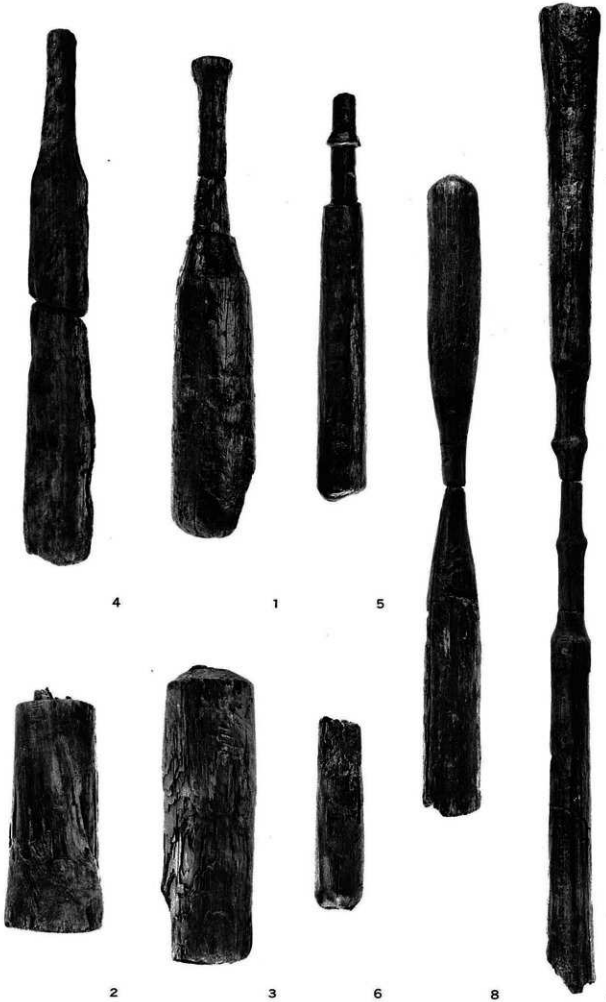
3

1, 2, 3, 鋤 BⅢ 1:4

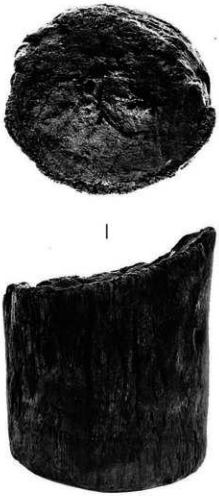


6 7

6, 7, 鋤の柄 1:4



1, 2, 3, 槌 I 4, 槌 II 1:3 5, 6, 7, 杵 I 8, 杵 II 1:6



1

2

3

4

1, 2, 3, 4. 臼

1:2.5

1

2

3

4

1, 2, 3, 臼　4, 臼（未完成品）　1:2.5